

女子大学生のキャリア意識

加藤 容子*

Career consciousness of female collage students

Yoko KATO

問題と目的

近年、生徒や学生がいかに将来のキャリアを形成するかが重要であるという観点から、小学校から大学までの教育機関においてキャリアデザイン教育が実施され始めている。また、生徒や学生の時期だけでなく仕事をもつ成人においても、キャリア発達の節目で自らのキャリアを見直し再構築するという作業が注目され、それを支援する試みが実施されている。このように個人のキャリア形成を支援することは重要であるが、これを効果的に実施するためには、その個人が職業やキャリアに関してどのような意識をもっているかをふまえることが必要であるといえよう。ここでは、特に大学生のキャリアを支援するために有用な知見を得るために、大学生のキャリアに関する意識について検討を進めたい。

心理学におけるこの領域の研究を見てみると、十分に知見が積み重なっているとはいえない。概念の名称をとりあげても、「職業観」「職業意識」「キャリア観」「キャリア意識」と複数存在しており、測定尺度の構成要素もさまざまである。したがって、まずは先行研究を概観し、これらの概念の測定尺度について検討することが必要である。

なおこのとき、ジェンダーを考慮に入れて検討を進めたい。女性のキャリアと男性のキャリアを比較すると、性別役割分業やジェンダー差のある就業状況などの影響を受けて、そのあり方は大きく異なっているためである。具体的には、男性は卒業後仕事役割を担いその後家庭役割を得て両方を継続するキャリアが多数を占めているのに対して、女性の場合は、仕事役割と家庭役割を継続するキャリア、結婚や出産を機に仕事役割をやめて家庭役割のみを担うキャリア、結婚や出産を機に仕事役割をやめるが後に再び仕事役割を得るキャリアなど多様なキャリアが選択されている。このようにキャリアのコースが多様に開かれている分、女性のキャリアに関する意識もその多様性を反映したものが必要であると考えられる。

このうち、特にワーク・ライフ・バランスに関する意識を問うことが必要ではないだろうか。大学生のキャリアのとらえ方について調査した河崎（2002）によると、男子大学生は職業キャリアを人生の中心と位置づけている一方で、女子大学生は職業キャリアは楽しみや生きがいのためのものとして位置づけ、生活キャリア（家庭役割を含むもの）は逃れられない責任として位置づけていたという。また、女子大学生のライフコースの選択と不安に関する加藤（2004）の調査結果からは、女子大学生が希望するライフコースは、仕事役割と家庭役割の継続両立と、

*心理学科 講師

結婚・出産による一時退職後再就職する両立が多く希望された。しかし将来のキャリアに対する不安や予期対処としては、継続両立希望者は、「職場環境が自分のライフスタイルを認めてくれるか不安」と感じながらも、「その不安を低減させるような職場を主体的に選択」したり、「自分のライフスタイルを認めてくれるようなパートナーとの協力関係を築く」といった問題解決的な対処を検討しており、自律的・主体的なキャリア意識が見られた。一方、一時退職後再就職希望者は、「再就職を希望するときに不安」と感じているが、それに対しては「仕事面での専門性を高める」対処をする場合もあれば、「なりゆきまかせ」と対処を放棄する場合も見られ、受動的・状況依存的なキャリア意識が見出された。これらの研究からは、女子大学生のキャリアに関する意識として、ワーク・ライフ・バランスが重要な位置を占めていること、そのあり方には個人差があることが見られる。したがってこれ以降では、女子大学生のキャリアに関する意識の観点も含めて、先行研究について概観する。

坂柳(1996)は「成人キャリア成熟尺度」を作成し、「自分の人生に関心をもっている」などから成る「人生キャリア関心性」、「自分の人生を主体的に送っている」などから成る「人生キャリア自律性」、「これからの人生や生き方に、自分なりの見通しをもっている」などから成る「人生キャリア計画性」という3つの下位尺度を構成した。これは、キャリアに関する意識を3つの側面からとらえ、妥当性を備えた構成となっている点で有用であると考えられる。しかし、女子大学生特有の問題を扱っているとはいえない。

安達(2004)は「キャリア意識」を作成し、「自分のやりたい事を実現しようという野心がある」などから成る「適職信仰」、「自分の好きな事が出来る環境にいたい」などから成る「やりたいこと志向」、「将来どうなるかは、そのときの流れだと思ふ」などから成る「受身」の3つの下位尺度を構成した。これは、特に近年のキャリア意識をとらえている点で意義深い。しかしやはり、女子大学生特有の意識は含まれていない。

森永(1993, 1997)は「仕事に関する価値観」を作成し、「労働条件がよい」などから成る「労働条件」、「仕事で認められるようになる」などから成る「上昇志向」、「他人の役に立つ」などから成る「社会貢献」、「仕事の内容に変化がある」などから成る「知的刺激」、「男女平等である」などから成る「男女平等」、「家族と一緒に過ごす時間」などから成る「家族への配慮」の6つの下位尺度を構成した。このうち、「男女平等」と「家族への配慮」の各下位尺度は、女子大学生のワーク・ライフ・バランスに関する意識を一部反映したものであると考えられる。

宗方(2002)は、女子大学生が望む「ワークスタイル」尺度を作成し、「家庭生活に支障が出ないような働き方をする」などから成る「私生活志向」、「想像力を必要とする仕事をする」などから成る「独自性志向」、「終身雇用が約束される会社で働く」などから成る「安定志向」、「会社の重要な幹部になる」などから成る「出世志向」、「特定の領域で、自分の能力や技術を活かした仕事をする」などから成る「自己実現志向」、「人の役に立つ、奉仕的な仕事をする」などから成る「社会貢献志向」、「収入より、仕事の内容を重視する働き方をする」などから成る「やりがい志向」、「転職を通じて、よりよい仕事を見つけてゆく」などから成る「流動志向」の8つの下位尺度を構成した。このうち、「私生活志向」は、女子大学生のワーク・ライフ・バランスに関する意識を一部反映したものであると考えられた。

田澤(2005)は、「仕事役割と家庭役割のバランス」尺度を作成した。これは、「子どもにさびしい思いをさせないこと」といった「家族役割」と、「仕事に生きがいを感じる」といった「仕事役割」の2つの下位尺度から成るものであり、これらの2つの下位尺度得点の高低の組み合わせによって、仕事役割と家庭役割のバランスを測定しようとしたものである。これ

は、女子大学生のワーク・ライフ・バランスそのものを扱っている点で、有用である。ただし、女子大学生がワーク・ライフ・バランスをどのように感じているのか、という意識を直接的に問うものではない。

以上より、一般的な大学生のキャリアに関する意識は多岐に渡ることが確認された。さらに、女子大学生特有のワーク・ライフ・バランスを直接扱った尺度は現時点では開発されておらず、今後の大きな課題として残されているといえる。

したがって本研究では、今後女子大学生のキャリアに関する意識の測定尺度を開発するために、その前段階として彼女らの意見を抽出することを目的とする。

女子大学生のワーク・ライフ・バランスの意識を問うためには、その根底にある自立と共生に関するイメージをとらえることとした。岡本（2002）は、アイデンティティの2つの側面である個としてのアイデンティティと関係性にもとづくアイデンティティを、生活レベルに応用したときに見える視座として自立と共生という概念を提示し、これらの力を育てることが青少年を対象とした学校教育の中で重要であるという。アイデンティティに支えられるキャリアにおいても、この2つの観点は有用であろうと考えられる。また本研究で注目するワーク・ライフ・バランスは、個として自立して経済活動を営む仕事役割と、家庭や地域の中で関係性を紡いだり子や親のケアをするという営みである家庭役割とのバランスを指す概念である。ここには、個としての自立と他者との共生という2つの要素のバランスをどのようにするかという観点が、大きく影響すると考えられる。

以上より、本研究では、女子大学生の自立的な人生に対するイメージと共生的な人生に対するイメージを問うことによって、彼女らのキャリアに関する意識を探索的に検討することとする。

方法

対象者：女子大学1年生 40名

質問内容：

- ①属性 年齢、婚姻、子どもの有無、職歴の有無、アルバイト歴の有無をたずねた。
- ②自立と共生の意識 自立と共生のイメージの補助的な指標として、キャリアについての自立的な意識を問う2項目（自分の人生は主体的に送っていく。人生や生き方には、自分で責任をもつ。）と、共生を問う2項目（周りの状況（夫の仕事や育児）に合わせて、人生を送っていく。結婚相手や仕事状況によって、自分の人生はどうなるか分からない。）を独自に作成し、6件法で回答を求めた。
- ③自立的な人生に対するイメージ 「自分の意思（やりたいこと、大切にしたいこと）を実現するという人生に対して、どのようなイメージをもっていますか？期待や不安も含めて、自由にお書きください」という教示により、自由記述を求めた。
- ④共生的な人生に対するイメージ 「他者との関係を築いたり他者の世話をするという人生に対してどのようなイメージをもっていますか？期待や不安も含めて、自由にお書きください」という教示により、自由記述を求めた。

結果

1. 対象者の属性

対象者は、平均年齢18.55歳（18～19歳）の大学1年生であった。すべての対象者が、未婚で子どもはおらず職歴もなかった。またアルバイトについては、33名（82.5%）が経験しており、7名（17.5%）が経験していなかった。

2. 自立と共生の意識

自立を問う2項目の平均得点と、共生を問う2項目の平均得点を算出した。その結果、自立得点は平均値4.44、標準偏差0.79、共生得点は平均値4.36、標準偏差0.90であった。したがって、対象者の自立的な意識と共生的な意識は、同程度であることが示された。

また、自立意識と共生意識の組み合わせを見るために、それぞれの平均値で高群と低群に分けて、クロス集計を行った。その結果、自立意識低・共生意識低群は5名、自立意識低・共生意識高群は13名、自立意識高・共生意識低群は10名、自立意識高・共生意識高群は12名であった。ここから、自立意識と共生意識のどちらかを強く感じている学生が同程度いるのに加えて、両方とも強く感じている学生も同程度いることが明らかとなった。

3. 自立的な人生に対するイメージ

自立的な人生に対するイメージについての自由記述回答を、KJ法で整理した。その結果、まず自立的な人生そのものに対する「自立へのイメージ」というカテゴリーが得られた。ここには、「自立への希望」と「自立への不安」、また「自己実現への希望」と「自己実現への不安」という4つの小カテゴリーが含まれた。これらの反応数は合計して34であり、対象者の大部分が自立に関して、不安や期待を明確なイメージとしてもっていることが分かった。

一方、自立へのイメージのみにとどまらず、他者と関係を築く共生的な人生とのかねあいについても言及している「共生とのかねあい」というカテゴリーも得られ、反応数は10であった。ここには、特に仕事役割と家庭役割の両立を考慮に入れ、これに対する希望と不安を述べた「仕事と家庭両立への希望」「仕事と家庭両立への不安」という小カテゴリー、自立を望むことによって他の何かを犠牲にすることになるという「犠牲への不安」、自立を望んでも他者との関係によってうまくいかないこともあるという「自立不達成への不安」、自立を望むだけの人生を望ましくないとする「自立希求のみの否定」といった小カテゴリーが含まれた。反応数はそれほど多くないが、自立的な人生をイメージする際に、共生的な人生とのかねあいでの欲求や難しさが想起される場合のあることが明らかとなった。

4. 共生的な人生に対するイメージ

共生的な人生に対するイメージについての自由記述回答を、KJ法で整理した。その結果、まず共生的な人生そのものに対する「共生へのイメージ」というカテゴリーが得られた。ここには、「世話への希望」と「世話への不安」、また「関係形成への希望」と「関係形成への不安」という4つの小カテゴリーが含まれた。これらの反応数は合計して35であり、対象者の大部分が共生的な人生に関して、不安や期待を明確なイメージとしてもっていることが分かった。

一方、共生へのイメージのみにとどまらず、自立的な人生とのかねあいについても言及して

女子大学生のキャリア意識

表1 自立的な人生に対するイメージへの回答結果（重複回答含む）

カテゴリー	反応例	反応数
自立へのイメージ		34
自立への希望	自分の食い扶持は自分でかせぎたい	1
自立への不安	ちゃんと自分のことを自分でできるか不安	4
自己実現への希望	自分の夢は実現させたい	18
自己実現への不安	やりたいことが自分に合っているか不安	11
共生とのかねあい		10
仕事と家庭両立への希望	結婚しても仕事を辞める気はない	3
仕事と家庭両立への不安	子育てができるか不安	1
犠牲への不安	何かを犠牲にすることがあると思う	3
自立不達成への不安	望んでいてもどうにもならないことがある	2
自立希求のみの否定	自分のやりたいことだけやってもよくない	1

表2 共生的な人生に対するイメージへの回答結果（重複回答含む）

カテゴリー	反応例	反応数
共生へのイメージ		35
世話への希望	世話はやりがいを感じそう	11
世話への不安	他者の世話をするのは不安	3
関係形成への希望	だれかと深いつながりをもりたい	14
関係形成への不安	人と接するのは難しい	7
自立とのかねあい		5
自立のあきらめ	自分のやりたいものをあきらめないといけない	4
共生希求のみの否定	世話をせばかりは苦痛	1

いる「自立とのかねあい」というカテゴリーも得られ、反応数は5であった。ここには、共生的な人生を送ることで個人的欲求をあきらめるという「自立のあきらめ」、共生のうち特に世話をすることのみの人生への苦痛を表した「共生希求のみの否定」が含まれた。ここでも、反応数はそれほど多いものではないが、共生的な人生をイメージする際に、自立的な人生とのかねあいでの欲求や難しさが想起される場合のあることが明らかとなった。

考察

女子大学生に対する本調査の結果、人生イメージとしての自立や共生についてたずねた際に、それぞれへの希望や不安が見出された。本調査の対象者はすべて大学1年生であったが、その大部分の人が、自らの人生に対するイメージをもっていたことが分かった。自立へのイメージにおいては、自立的な生活そのものへの希望や不安よりも、自己実現に関する希望や不安が多く見出され、対象者が自己実現に関心をもっていることが見出された。また共生へのイメージにおいては、世話をすることや関係を形成することへの希望や不安がそれぞれ同程度見られた。世話においても関係形成においても不安よりも希望の方が多く回答されており、対象者の関係性志向が見出された。

その一方で、自立的な人生に対するイメージを問うたときに共生的な人生とのかねあいについての回答が得られ、共生的な人生に対するイメージを問うたときに自立的な人生とのかねあいについての回答が得られたことは、注目される。自立的な意識と共生的な意識を問うた得点を見てみても、どちらかの得点が高い学生だけでなく、両方の得点が高い学生もいたということも、この結果に関連するだろう。すなわち、女子大学生においては、自立的な人生を想定するときには、他者と共生する人生と両立したいという思いや、他者と共生するために自立的な人生が変更するかもしれないという思いが同時に生じるようである。また、共生的な人生を想定するときには、自立的な人生が犠牲になるかもしれないという思いが生じるようであった。したがって、女子大学生のキャリアに関する意識は、これらの自立と共生のかねあい、バランス、あきらめ、競合といった要素を含めて検討することが重要であると考えられる。

本研究の結果より、女子大学生のキャリア意識を抽出するためには、自立的な人生と共生的な人生とのバランス、より具体的にはワーク・ライフ・バランスに関する項目を含めた尺度を開発することが重要であるといえた。今後は、本研究で得られた回答結果を参考にして、具体的な項目を作成して心理測定尺度を構成することが課題となる。

引用文献

- 安達智子 2004 大学生のキャリア選択—その心理的背景と支援 日本労働研究雑誌, 533, 27-37.
- 加藤容子 2004 女子大学生のライフコースの選択とそれへの不安 名古屋大学学生相談総合センター紀要, 4, 23-30.
- 河崎智恵 2002 アイデンティティを支える教育—キャリア教育を通じてアイデンティティを育てる 岡本祐子(編) アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房, 241-259.
- 森永康子 1993 男女大学生の仕事に関する価値観 社会心理学研究, 9, 97-104.
- 森永康子 1997 大卒・短大卒女性の仕事に関する価値観 教育心理学研究, 45, 166-172.
- 宗方比佐子 2002 職業興味の構造に関する実証的研究(2) 桜花学園大学研究紀要, 4, 79-91.
- 岡本祐子 2002 アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房
- 坂柳恒夫 1996 成人キャリア成熟尺度 愛教大教科教育センター研究報告, 20, 9-18.
- 田澤 実 2005 女子大学生が展望する仕事役割と家族役割のバランスと将来イメージの関係 キャリアデザイン研究, 1, 123-133.